

農の持つ潜在力を 教えてくれる農場



—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

この11月上旬、5、6年ぶりに韓国を再訪した。2014年に発行した拙著「地域からの農業再興」（創森社）の韓国語版が出版されたことから、訳者等へのあいさつが主目的の訪韓であったが、この機会を利用して、12年に施行された協同組合基本法のその後の動向についてヒアリングすると同時に現場見学をしてきた。その一つが社会的協同組合（非営利の社会的目的実現を優先する協同組合）による農場で、医福食農連携による農作業によって発揮される農が持つ総合的治癒能力を生かした取り組みを行っており、非常に興味をひかれた。

農場はソウル市の東の京畿道、ソウル中心部から車で1時間強のところにある。広さはちょうど1万坪（3.3ヘクタール）で、中山間地域にある傾斜地を切り開いたものである。コメ、麦、各種野菜、シタケ、マッシュルーム等を親環境農業（有機農業、無農薬栽培）によって生産しており、豚、鶏、ヤギ、養蜂を加えた有畜複合経営を展開している。人間の健康のためには免疫力を高めることが肝心であるように、農業も土中の微生物を活性化させて地力を高めていくことが必要である。このため山野草の芽を発酵させた養液を散布するなど、独自に編み出した自然農法を取り入れている。

この農場は15年に社会的協同組合として設立されており、組合長は精神科医のコー・ヤン氏である。病院



手前左がコー組合長、右がパクさん

の屋上を使つての作業療法に取り組む中でその効果を確信するようになって農場づくりに着手。協同組合基本法の施行を機に本格的な農場づくりを開始し、自然農法を取り入れた親環境農業への取り組みと在来種を尊重した本来的農業を展開する中で、精神的な障害を抱える人たちを農作業や農業体験を通じて立ち直らせ、社会参加を可能にしてきた。

270人の組合員のうち70人が障害者で、残りはその家族やボランティア、消費者、農家等となっている。農場の運営には常駐する3人の職員が当たっており、農作業は80人が参加する生産者組合によって行われている。生産された農畜産物は、自営の直売店やレストラン、自家消費に当てられるほか、近隣のローカルフード店にも販売される。

組合長にお会いした際に同席した女子学生のパクさんは、10年前に両親を失った後、健康を悪化させてひどいうつ病となったが、シェアハウスで共同生活をするとともに、週1回、この農場に通うことによって自分を取り戻すことができたという。そしてこの体験をたくさんの人たちに知ってもらいたいとして「共同体の力」「地域社会のケア」を訴える本を出版した。

このように医療という切り口から農業を捉え直し、農作業や農業体験という行為が人間の心身の健康にとって欠かせないとともに、自然の持つ力を引き出していくためには親環境農業によって健康な土にしていけることが不可欠であることを実証している。こうした取り組みを展開していくために社会的協同組合という“器”が有効であることをも示している。農業以外の分野からの農業へのアプローチは、農業の持つ潜在力を引き出していくのに大きな力を発揮していくことが期待されると同時に、農業の側もこうした取り組みに謙虚に学んでいくことが求められる。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。